

動物介在教育・療法学 基礎講座

第1回 活用動物に関する知識

2) 介在動物の特徴と扱い方

馬の特徴と扱い方

乗馬療育には、1) 人に取り囲まれ何処に触れられても動じない、2) 乗り手の不意の動きや嬌声にも動じない、3) 車椅子や療育用具などとの接触にも動じない馬を使いたい。しかし、馬は周囲に気を配り異常を感じたら逃げ出すことで生き延びてきた動物である。その馬にこれらの行動を獲得させるのは容易でない。幸い馬は群れを作りリーダーを信頼する動物である。馬はリーダーとして信頼する人が導くならば不安な状況下においても安心して行動する。人がリーダーとして信頼してもらうには、馬がリーダーを欲する時期から、リーダーとして求められている行動をすればよい。当歳の馬は見知らぬ群れに直面すると、群れ構成員それぞれに鼻先を合わせ唇を細かく震わせて挨拶することで群れに仲間入りする。したがって、この頃に人がリーダーとして接触始めるのが望ましいと思われる。これまでの乗馬や調教は「人は私より強い、だから指示を受け入れましょう」と馬に言わせるリーダーを目指している。乗馬療育では「人は私を守ってくれる、だから人と共に居ます」と言わせるリーダーを目指す。馬がリーダーに求めることは、周囲の安全を見極め対処方を示すことである。新規な事態（見知らぬ動物の接近）が発生した際、リーダーは群れの前面に立って事態を把握し、逃げあるいは無視する。群れはリーダーの行動を見て逃げ散りあるいは安堵して草を食み続ける。リーダーになろうとする人は馬の居る場所に積極的に入り込み、訪問者などとの受け答え、器物や餌などの受け取りを馬の側（柵内）から行なう。馬はそれを見て「不安な物に対して人は安全に対応する」と信頼するようになる。写真では、風にあおられているブルーシート上に三角コーン・車椅子・調馬索などが散乱していても、人（リーダー）が呼ぶと馬は自らシートを踏んで人に近づいて来ている。日ごろから「どのように行動したらリーダーとして信頼してもらえるか」を意識して接するならばさほど困難な問題ではない。

人をリーダーとして信頼するようになった馬は1)～3)の行動を比較的容易に獲得する。1) 乗馬療育の対象とする子どもたちに伸び伸びと活動してもらうため、馬が子どもたちの行動を受け入れるよう調教する。リーダーとその関係者は可能なかぎり馬と一緒に



行動し、機会をとらえては馬を愛撫する。愛撫に留まらず子どもが行う行動を想定し尾を引っ張ったり足に抱きついたりお腹の下で作業したりする。訪問者との打ち合わせや談笑も馬と共に行う。2) 乗馬する子どもの動きに慣れてもらうため、リーダーは、馬の前後左右各所から乗馬・下馬する（後ろへずれて尾を支えにしながら降りるなど）。乗馬中は大きな動作をし、大声を出し、鞍からはずれた位置にも座る（馬の安全のため体重軽い人が短時間）。広げた傘やビニール袋などを散乱させた馬場での乗馬もする。3) 利用機器に慣れてもらうため、新たな療育用具を使用する前には、十分に見させ嗅がせ触れさせる。馬が納得したらその用具を振り回し、音を立て、全身に触れる。

子どもの動きを想定して馴致させておけば子どもの激しい感情発露にも動じない馬となり、指導者は子どもの指導に集中できる。

慶野宏臣・裕美（なつか乗馬療育研究所）

犬の特徴と扱い方

1) 介在動物としての犬の特徴

犬は1万5千年前に家畜化され、人との歴史が最も古い。昔話に登場し幼少期からなじみ深い動物である。近年ではテレビのCMや番組に登場して犬を見かけない日はない。これらを踏まえて不特定多数の人を対象としたプログラムを実施する際の犬の特徴をあげると、目的に応じた犬種を選ぶことが可能（毛の特徴や大きさ、特性など）、トレーニングにより行動を制御することが可能（排泄、行動面の管理など）、日本では飼育頭数が多いので犬の存在は一般的、ボディランゲージ（しっぽや体の動き）から感情を推測しやすい。

動物介在教育を実施するうえで、導入として「動物に興味を持つ」ことが大切。「興味を持つ」ことで「好き」になり、「大切にする」気持ちが芽生える。まず、興味を持ってもらうには、その動物の体の構造を自分や他の動物と比較してみる。ここでは、犬と接する際に気を付けるべき最低限必要な犬の体の特徴につ

いて述べる。

①犬の目：犬の目は、100 cm より近い距離でははっきりとものを見ることができない。そのため近くのものには臭いで確かめる。犬には、目の位置が比較的顔の前面に位置しているため立体視野（両目でとらえることができる視野）域がある（図）。しかし、犬種によって眼の位置が大きく異なるので、視野に顕著な差が見られる。人は広い立体視野を持っている。見える範囲を考慮すると、動物との接し方を考えることができる。

②犬のしっぽ：犬種により尻尾の形は多様で、尻尾や腰を振って感情を表現する。尻尾を振るのは興奮を示し、その高さや振り方によって緊張や攻撃等様々な複合的な感情を示す。一般的に尻尾を振るとうれいと思われているが、そうではないこともあるので気を付ける必要がある。

2) 犬の扱い方

上記であげた犬の特徴から、子どもが犬を扱う際に注意すべきことや犬を扱うハンドラーの注意すべき点について述べる。

①子どもが扱う場合：犬にとって、初めて会う不特定多数の子どもは脅威に違いない。そのため、犬にとって負担にならないような接し方を教えることが大切。犬の体の特徴から説明すると説得力がある。

- ・犬との距離⇒犬の目の特徴：犬と接する際は近寄りすぎない。また、急に近づかない。
- ・どこから触るか⇒犬の見える範囲：後ろから突然触るのはよくない。犬から見えるところから触るが、頭を避け首や背中をゆっくりと触る。
- ・犬の尻尾・表情・体の硬直を見る⇒犬のしっぽ：自分から近寄っていくことは犬にとって負担になるため、犬から近寄ってくるまで待つ。その際に、犬の尻尾、表情、体の硬直具合を観察して判断する。犬のハンドラーが助言するのが望ましい。

②犬のハンドラーが扱う場合：犬とのコミュニケー



図1 犬の見える範囲

ションに必要なのは「服従」ではなく、どのように自分に向いてくれるかである。犬とのコミュニケーションを図る「過程」が重要。「力」で制圧するのではなく、相手の気持ちを考えてどうしたら、お互いに歩み寄れるかを大人からのヒントを得ながら子ども自身が答えを出すことが学びである。基本的に子どもは大人の真似をする。常に見られているという意識をもって、実践に望むことが大切。子どもたちが真似しやすい事柄をあげる：指示を出す声の強さ・大きさ、言い方、態度、リードの使い方。

鹿野 都 (麻布大学)

小動物の特徴と扱い方

活用動物に求められることは、健康であること、手入れされていること、臆病さが低いこと、触られることが嫌いでないこと、外出に慣れていること、など。教育の現場ではウサギやモルモットなどの小動物が活躍する。ここでは、このような現場に用いる小動物の特徴と扱い方についての概略を述べる。

ウサギやモルモットなどの小動物はもともと肉食動物に追われる動物種なので、基本的に臆病。特定の飼養者が世話をしているも、活用の場に大勢の人がかかわるのであれば、動物にとってかなり負担。したがって、活用する小動物はなるべく臆病さが低く、さまざまな人に触られることやさまざまな場所に連れて行かれることに慣らした個体。小動物は基本的に触られることを嫌うので、活用する動物種や品種をよく選定する。同一品種の中でも個体差があるので、個体の気質を熟知しておく。嚙歯類でも好奇心の強い個体もいるので、飼養中にそのような個体を特定しておく。ただし、飼養者がどんなに温厚と判断した個体でも、動物は人ではないことを充分理解しておく。

小動物による長時間のふれあい活動は避ける。嚙歯類の中でもネズミであれば、カップ容器やトンネル器具内に入れて観察するなどして、直接さわることをなるべく避けるとともに、床にネズミ返しなどの防壁を設けて逸走防止を図る。活動中の個体の排泄行動やグルーミング行動などに注意して、場合によっては個体の交代を行い、個体の負荷に配慮し、プログラムを動物に負担のないものにする。

小動物の輸送はホームケージで。日常の匂いのする環境を大切にすること。日ごろからキャリーに慣れさせておくのも良い。移動時には、給水に配慮。ただし、ホームケージが濡れると困るので、給水器は休憩時に設置。

飼養動物にとって日常の環境は身を護るための最大の武器である。人のための活動ではあっても、動物あつての活動であることを念頭において欲しい。

土田あさみ (東京農業大学)